

# 古典文学作品の〈しかけ〉への学習者の反応

高橋由美  
(広島大学教育学部)

## 1. はじめに

本論稿は、古典文学作品の〈しかけ〉への学習者の反応を、実態調査の分析を通して明らかにすることを目的としている。

文学作品には、読者がそれに反応することによって読みを成立させるような〈しかけ〉が存在し、その〈しかけ〉に読者が反応するかどうかにより、形成される読みや作品像は異なってくる。したがって、学習指導に際しては、学習者がその作品の〈しかけ〉にどの程度反応できるのかを明らかにしておく必要がある。

古典作品の場合には、歴史的・社会的基盤や表現方法といった古典特有のものが〈しかけ〉としてはたらく<sup>2</sup>。古典作品は時代的に現代と離れたものであるので、読者が古典作品を読む際、同時代の作品であったならば〈しかけ〉として機能しないような要素までが、読みの〈しかけ〉となることが予測できるのである。同時代の読者なら、知らず知らずのうちに反応していた〈しかけ〉でも、現代の読者は、文学研究の成果などによって〈しかけ〉を探し出して意識化して読むことも必要となるだろう。また、現代の読者が意識化しにくい古典作品に固有なものは、読み深まりとも関わるため、学習者が反応した〈しかけ〉から、作品の独自性を生かした読みがどの程度なされているのかを推測することも可能である。

以上の立場に立ち、〈しかけ〉への反応の実態を調査し、学習者が反応できる〈しかけ〉と反応できない〈しかけ〉を明らかにすることができれば、授業において注目させなければならない作品の表現や与えなければならない作品外の情報についても示唆を得ることができると考えた。さらに、作品の何に注目させれば読みを深め豊かにできるのかも示すことができるであろう。この意味で、学習者の読みと作品の〈しかけ〉との関わりを明らかにすることを目指し、本論稿を古典の学習指導を構想する前提として位置づけたい。

なお、調査に当たり、テキストは「小柴垣のもと」(『源氏物語』若紫 筑摩書房「国語Ⅱ二訂版」所収 一九九一年三月検定)を用いた。

## 2. 調査

### 2. 1. 調査の実際

調査の概要は以下の通りである。

〈調査対象〉 広島大学教育学部附属高等学校Ⅱ年3組 男子23名、女子16名(かなりの読解力を持った生徒たちである)

〈調査日時〉 1993年7月6-8日

〈テキスト〉 教科書教材「小柴垣のもと」(筑摩書房 国語Ⅱより) 本文に調査者の判断で適宜傍注を付したものを利用した<sup>3</sup>。

〈調査方法〉 傍注テキストを調査者が二回音読し、その後、設問に答えてもらうという形をとった。

〈調査項目〉 調査では、質問項目を文章展開に即して並べ、学習者に示したが、以下には考察の便宜上、分類し直したものを載せる。

- I 「かいま見」表現に関するもの
- ①「かく思ひの他なることを見るよ」とあるが、光源氏がここで見たことが書かれているのはどこからどこまでか、始めと終わりの五字ずつを抜き出さない。
- ②「ただこの西面にしも、持仏すゑたてまつりて行ふ、尼なりけり」について。誰の気持ちを表していますか。
- ③髪ゆるるかにいと長く、めやすき人なめり。少納言の乳母とこそ人言ふめるはこの子の後見なるべし」の部分に見える「めり」と「べし」は、誰の判断を示しているか、答えなさい。
- ④文章中に描かれている女子(=若紫)について、次の間に答えなさい。  
 イ 光源氏はこの「女子」をどう思っているのでしょうか、表現を抜き出して説明しなさい。  
 ロ イのように思っている光源氏のことをあなたはどのように思いますか。
- II 古典特有のことばに関するもの
- ⑤「ただこの西面にしも、持仏すゑたてまつりて行ふ、尼なりけり」について。この部分にはどのような気持ちが表れていますか。
- ⑥尼君の歌「生ひたたむありかも知らぬ若草をおくらす露ぞ消えむそらなき」について、次の間に答えなさい。  
 イ 和歌には何か(人や物)を素材に託して詠むことがあります。この歌の場合は何がどの素材に託されていますか。  
 ロ その場合、どのような効果をあげていますか。
- III 人物像に関するもの
- ⑦大人女房の歌「初草の生ひゆく末も知らぬ間にいかでか露の消えむとすらむ」について。大人女房はどのような気持ちでこの歌を詠んだのでしょうか、説明しなさい。
- ⑧僧都と尼君のやりとりについて、次の間に答えなさい。  
 イ 僧都は光源氏がやってきたことを知って、これからどうしようとしていますか、説明しなさい。  
 ロ 尼君は僧都の言葉を聞いてどう思っていますか、僧都との違いがわかるように説明しなさい。
- IV 伏線に関するもの
- ⑨「かの人の御代はりに、明け暮れの慰めにも見ばや、と思ふ心深うつきぬ。」の部分について、なぜそのように思ったのか、説明しなさい。

## 2. 1. 調査項目と作品のくしかけ>との関わり

以上にあげた質問項目と、古典文学作品のくしかけ>との関わりは以下のようである。

### A 「かいま見」表現<sup>4</sup>によるくしかけ>

「小柴垣のもと」は、源氏の「かいま見」による場面が中心である。古典文学に表れた「かいま見」表現は、「かいま見る人物」の目から、「見られる人物」の姿を見ることによって、「見る人物」の心理を読みとらせ、さらに、語り手の目から「かいま見る人物」を見ることによって、「見る人物」の心理を直接に読みとらせるという手法である。「小柴垣のもと」の場合、このような「かいま見」表現は、源氏の目から若紫や尼の様子を見、語り手の目から光源氏を見るという体験を読者に導くくしかけ>となる。学習指導においては、「かいま見」表現のくしかけ>について、視点を意識化させ、視点を踏まえた読みができるように指導する必要がある<sup>5</sup>。

### B 古典特有のことばによるくしかけ>

ここで言う古典特有のことばとは、現代では用いられないことばや、用いられていても意味が異なっていることば、つまり古語と呼ばれることばはもちろん、助動詞や助詞、歴史的・社会的意味を担ったことば、歌語などを指す。これらのことばに注目することによって、そこから人物の心情

や状況を読みとることができたり、新たなイメージや意味が付加されたりする。この意味において、古典特有のことばは<くしかけ>となる。このような古典特有のことばは、読者の知識の有無によって、<くしかけ>となりうるかどうかが決まるが、知識を持っていても、それらを意識して読みに生かされなければ<くしかけ>として機能しない。学習指導においては、言語的知識とその活用が問題として提示できる。

C 人物像を形成させる<くしかけ>

テキスト中に設定されている人物の状況や立場、関係などは、読者に人物像を形成させる<くしかけ>である。ただし、それらは作品成立当時の社会的状況にも規定されるので、現代の読者が古典を読む際には、書かれた時代状況の中にテキストを置いて読むことも必要であろう。古典の学習指導においては、学習者の既有的知識にもとづき、人物の状況に関わるテキスト中の情報を関連づけさせるとともに、時代状況をも加えて考えさせる必要がある。

D 伏線による<くしかけ>

古典文学においても、伏線は、後の展開を予測させたり、その展開を後から理由づけさせたりする<くしかけ>である。例えば、「小柴垣のもと」には、この後展開する「藤壺の物語」の発端を予測させるような伏線が見える。古典の学習指導では、このような<くしかけ>に対して、物語全体への視野を持ち、テキスト中の情報を関連づけさせようとする必要がある。

3. 結果の分析と考察

前項で述べた作品の<くしかけ>の分類に従って、調査結果の分析を以下に行う。

3. 1. 分析Ⅰ－「かいま見」表現による<くしかけ>への反応－

問①②③は、「かいま見」表現の範囲と視点人物を問い、「かいま見」構造が理解されているかどうかを調べるものである。

正解	27(75.0%)
不正解	2( 5.6%)
無解答	7(19.4%)

源氏の心情	32(88.9%)
尼の心情	1( 2.8%)
無解答	3( 8.3%)

源氏の判断	19(52.7%)
作者の判断	3( 8.3%)
源氏と作者の判断	2( 5.6%)
女房の判断	2( 5.6%)
無解答	10(27.8%)

問①は、「かいま見」による場面の範囲の理解度を調べたものである(表1)。ほとんどの学習者は、「源氏の見たことが書かれている」部分として「かいま見」の場面を把握できている。学習者は「かいま見」という用語を知らないので、「かいま見場面を指摘せよ」という問い方をすれば正解は少なかったと思われる。しかし、他の場面とは異なった描かれ方をしている、源氏の視点による場面、のような認識はある。読みの際に意識化はできていないが、<くしかけ>には、反応していると考えた。

問②は、視点人物についての質問である。「かいま見」表現では、かいま見る源氏の視点でかいま見られる人物たちが描かれており、その描写には源氏の心情が表れる。直前の部分の主語が源氏であるためか、この部分の視点人物を指摘することは容易であった(表2)。

問③では、助動詞に表れている判断が誰のものであるのかを問い、視点人物を把握しているかどうかを調べた(表3)。「源氏」と答えた学習者は、<くしかけ>に反応し、源氏の視点に寄り添ってこの部分を読んでいると推測できる。「作者」という解答は、作者の解説としてこの部分を読んではまっており、「かいま見」表現の<くしかけ>に反応できていない。

問④は、「かいま見」表現における語りの視点に関する質問である。ここでは、光源氏の心情を問い、「かいま見」表現における語りの視点という<くしかけ>に反応できているかを調べた(表4)。

学習者が指摘した部分は、テキスト全体にわたっている。ここで、源氏の心情が直接表れている表現を指摘した学習者は多く、「かいま見」表現における若紫の描写から源氏の心情を読みとった

[表4]

源氏の心情の直接的な表現を指摘したもの (合計54)	
いとうつくしかりける児	16
心を尽くしきこゆる人にいとよう似たてまつれる	11
かの人の御代はりに明け暮れの慰めにも見ばや	11
ねびゆかむさまゆかしき人かな	7
あはれなる人	5
なに人ならむ	4
「かいま見」場面での若紫の容姿の描写を指摘したもの (合計8)	
あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、 いみじく生ひ先見えて、うくしげなる容貌なり。	5
つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、 いはけなくかいはりたる額つき、髪ざし、いみじうつくし。	3

解答が少ないことは注目できる。源氏の心情が直接表れている部分は、語り手が源氏の視点から離れた部分であるが、「かいま見」場面での若紫の描写は、語り手が源氏の視点に寄り添って語っている部分である。後者において、「かいま見」表現の〈しかけ〉はより特徴的である。学習者は、語り手が源氏の視点から離れて語る、語りの〈しかけ〉には、語り手から源氏への敬語が用いられているためか、反応しやすかったと考えられる。しかし、語り手が源氏の視点に寄り添う、「かいま見」表現に特徴的なくしかけ〉には反応できていない。

問④口では、「光源氏のことをあなたはどのように思いますか」と問い、若紫に魅かれていく源氏に対する学習者の感想を調べた。テキスト中の「かいま見」表現において、語りの視点は、源氏に寄り添ったり離れたりする。このような語りの視点は、読者に同化的な読みや異化的な読みを導く〈しかけ〉である。

以下の例は、源氏を批判的に見ているものである。

- 
- A また、女の人を好きになったのかなあ。女好きだ。  
 B 現在こんな人がいたらちょっといやだ。  
 C 一人の強くしたう人がいながら、他の女の人をどんどん好きになるとはつくづく人騒がせな人だと思ふ。  
 D 「最愛の人に似ているから側においておきたい。」という考え方は、相手の女子にとってはいい迷惑だと思ふ。
- 

「若紫に魅かれていく」源氏の心情を異化し、学習者の価値観によって源氏の行為を批判している読みである。

以下は、源氏を批判的に見ながらも共感的な読みを形成している例である。

- 
- E 筋金入りの女好きでどうしようもないと思うが、かつての恋人の影に重ねてしまうのは何となくわかるような気がする。  
 F 勝手ではあるがわからないではない。
- 

藤壺に似ているから若紫に魅かれるのだということに源氏自身が気づく叙述部分では、語りの視点は、源氏に寄り添っている。Eは、そのような語りの視点によって、源氏の心情に同化する読みが起これたと考えられる。

次の例においては、全て源氏の「寂しさ」が指摘されている。これらの反応でも、最愛の人・藤壺の面影に若紫を重ねる源氏的心情への同化的読みが見られ、語りの視点という<しかけ>に反応した読みとなっている。

---

G 少しさみしそう (本当に好きな人がいるために)

H 亡くなった更衣の面影を追い求めるばかりに自分の父帝の妃を愛し、その人を得られないがため、女性遍歴を重ね、こんな小さな少女にさえそれを求めようとしている。女性として腹立たしく思うこともあるが、後に栄誉を極めた中の寂しさを感じられるようにも思う。

---

G・Hともに、テキストの他の部分と関わらせて、源氏に対する評価を行っている。特にHは、多くの女性を愛し栄華を極めながらも完全に満たされることのなかった光源氏の寂しさや悲しみといった、作品全体にわたるテーマをも感じとっている。ふとかいま見た十ばかりの少女に魅かれるということは、現代の学習者にとって理解しにくいと考えられる。しかし、当該テキストに見られる、藤壺を意識した記述により、学習者の読みは、光源氏へ反感を持つのではなく、その心理を想像し理解していく方向に向かっていると言えそうである。

---

I 昔の人の恋愛は今となんだか違うように思うから、源氏が「あやしい」とか「ちょっと変」とか言うのと源氏に悪いような気がする。

J 今で考えれば、妙に思えるが、当時は元服が十二歳なので、十歳の子供を絶賛しているのは当然のことに思える。女性にときめくという源氏の青春がよく表れていると思う。

---

I・Jは、学習者の持つ現代的な価値観に加えて、作品成立当時の社会的状況を持ち込み、源氏的心情を解釈した例である。G・Hとは異なり、少女に興味を抱く源氏に対して違和感ともいえるべき感情を抱いている。当時の社会的状況を持ち込むことによって、学習者自身が、そのような違和感をテキスト理解へと変化させているのである。<しかけ>に関していえば、源氏のかいま見への異化作用が働いた例であると言える。

### 3. 2. 分析Ⅱ—古典特有のことばによる<しかけ>への反応—

問⑤では、光源氏的心情を問い、古典特有の語句という<しかけ>に学習者が反応できているかを調べた(表5)。

源氏の驚きや興味を読みとっている以下のような反応は、「ただ・しも・けり」などからも、源氏的心情を読みとったと考えられる。

驚きと興味	14(38.9%)
喜び	2(8.3%)
尼への感想	7(19.4%)
無解答	7(19.4%)

---

Aのぞいてみると西向きの部屋で意外にも尼さんが持仏をすえてお勤めをしていたので驚いた気持ち。

B. 思わぬ所で思わぬ人を見つけたちょっとした驚き

---

A・Bは、「ただ・しも」によって示される偶然性を読みとっていると考えられる。古典特有の語句が、学習者に<しかけ>として機能したのである。Cは、小柴垣からそっと「かいま見」という源氏の行為や、学習者自身が持っている源氏に対する印象が、大きく作用した例であると考えられる。テキストから源氏の興味を読みとっているが、「ただ・しも・けり」など古典特有の語

句といったくしかけ>に、必ずしも反応したわけではない。

D偶然なので、うれしい、という気持ち。

Dは、テキストから偶然性を読みとっており、「ただ・しも」などの語句に反応していると考えられる。しかし、「うれしい」という源氏の心情は当該部分からは読みとれない。「ただ・しも」という語句のくしかけ>は機能しているが、そこから源氏の心情を考えることはできていない例である。

E静かに暮らしている人である。

Fとてもまじめな尼さんに対する快い感じを持っている。

E・Fは、仏道修行をする尼の描写を中心にこの部分を読み、それをもとに源氏の心情を推測したと考えられる。これらの学習者には、「ただ・しも・けり」といった語句が、源氏の心情を理解するためのくしかけ>として機能していない。そのかわり、学習者は、「持仏すゑたてまつりて行ふ」の尼の説明部を、源氏の心情を推測するためのきっかけにしている。

問⑤で無解答が多いのは、心情を直接表す語彙ではない語句から、源氏の心情を読みとることができていないためである。「しも・けり」といった古典特有の語句は、その意味を知識として持っていなければ、心情理解にまで生かすことはできない。つまり、学習者にくしかけ>として機能しないのである。また、「西面」や「持仏」といった語句の持つ仏教的意味が読み取れているのかどうかは、これらの解答からうかがうことはできない。これらの語句も、学習者が知識として持つことによって、くしかけ>となりうるものである。

問⑥では、和歌による技法とその効果を問い、和歌表現のくしかけ>への反応を調べた。尼君の歌には、それまでに述べてきた余命へのあきらめと若紫への心配が、「露」「若草」という比喩によって表されており、それらの言葉に凝縮された感情が、読者にも伝えられるくしかけ>となっている。「若草・露」に託されている人物については、ほとんどの学習者が指摘できている(表6)。

若草-少女、露-尼君	28(77.7%)
若草-少女	3( 8.3%)
素材のみの指摘	3( 8.3%)
無解答	2( 5.6%)

素材のイメージから効果を説明	22(64.7%)
比喩の技法から効果を説明	6(17.6%)
無解答	6(17.6%)

また、そのような技法を用いることの効果については、表7のような結果が得られた。以下の例は、素材の持つイメージから、尼君と若紫の心情や状況まで読みとっているものであり、語の持つ和歌的意味が、くしかけ>として機能している読みである。

G若草はいかにも元気で今から成長していく女子と重ねることができ、露は若草にとってそのときしかないものでいつかは先になくなることを象徴し、悲しさを示す効果を出している。

H女子の頼りなさや尼君の命のはかなさが強調されている。

このような反応が多いことから、「若草・露」は、素材の持つイメージをもとにして和歌的意味を比較的とらえやすく、人物像に結びつけやすい語であるとも指摘できる。次の解答は、比喩の技法から効果を説明しており、語の持つ和歌的意味には反応していないと考えられる。

- I 直接に表現するのではなく、自然の素材で読むことによって、歌らしくしている。言いたいこと以上のことが言える。
- J 直接的に言うより情趣がある。

比喩の技法を知識として持っており、その効果も理解できているが、「若草・露」といった素材のイメージを用いながら和歌を読めているかどうかは明らかでない。「若草」の初々しい美しさと「露」のはかなさをイメージしながらこの和歌を読んだとき、和歌的表現のくしかけ>に反応したと言えるが、上の例は、和歌の技法に対する観念的理解に止まっているようである。

問⑥の結果から、次のことが提示できる。和歌に詠まれた素材が学習者にとって既知のものであり想像しやすいものであった場合、和歌の内容から、その素材が示すものを把握してある程度の意味を導き出すことはできやすい。しかし、その素材のイメージを解釈に生かすことは、それほど容易ではなく、学習指導において何らかの手引きが必要である。

### 3. 3. 分析Ⅲ—人物像を形成させるくしかけ>への反応—

調査Ⅲでは、人物の立場や境遇、相互関係などを認識させるくしかけ>への反応を調べた。人物の心情を問うことによって、テキスト中に設定されている人物の立場や境遇、相互関係などをどの程度学習者が把握して人物像を形成しているかを調べようとした。

[表8]

尼君への同情と共感、励まし	26(72.2%)
少女への同情、将来への不安	3( 8.3%)
無解答	7(19.4%)

歌を詠んだときの大人女房の気持ちを答えさせた結果が表8であるが、ここに、学習者による大人女房のとらえ方を見ることができる。以下は、歌に表れた大人女房の心情を、尼君への同情と共感、励ましとして説明している例である。

- A 幼い孫を残して死ななければならない尼君を気の毒に思い、またそのような状況を理不尽だと思ふ気持ち。
- B 尼君の気持ちがよくわかる。同感です。どうして死ねましょうか。

次の例は、少女に対する将来の不安を読みとっているものである。

- C 幼い娘の不安な将来を案じ、悲しんでいる。
- D 尼君が亡くなってしまうと、幼い姫君はどうなるのだろうと姫君の将来を心配している。

以上の解答は、全て、女房の心情を適切に説明しているといえる。女房の歌は、尼君と同じ立場に立ち共感しながらも、尼君を励ましている。尼君に仕える女房の役割をも示しているのである。前者は、このような、尼君に仕える女房としての立場をも読みとっているが、後者は、和歌の内容から、若紫への心配のみを読んでいる。後者は、若紫を心配する女房の心情を説明することはできているが、女房の立場を踏まえた人物像は形成できていないのである。人物像を形成するくしかけ>に反応できていないためである。

問⑧では、僧都と尼君とのやりとりから、描き分けられている両者の人物像をどのように形成したのかを調べようとした(表9・10)。

[表9]

源氏に会いに行く	28(77.8%)
尼君を源氏に合わせる	4(11.1%)
簾を下ろす	1( 2.8%)
無解答	3( 8.3%)

[表10]

源氏に見られたことを心配	26(72.2%)
源氏に会いたくない	2( 5.6%)
僧都を批判	1( 2.8%)
源氏に会いたい	1( 2.8%)
無解答	6(16.7%)

表9で、僧都が「源氏に会いに行」こうとしていると答えた反応は、以下のようである。

E世間で大評判の源氏を見たくて、挨拶しようと思った。

Fよい機会だから、源氏に会っておこうとしている。

G尼君を連れて、源氏に挨拶に行こうとしている。

全て、僧都の言葉から、源氏への興味を読みとっている。僧都は、源氏がどんな理由でここに来ているのか、他人から見た源氏はどんな人物なのか、など源氏に関する情報を読者に提示し、それまでの場面に現れる人物とは異なる世間の代表として描かれている。表9の結果は、このような僧都の役割がよく読みとられていることを示す。人物の立場や役割という<しかけ>に学習者が反応したのである。

僧都の言葉に対する尼君の心情から、尼君の人物造形がどのようになされているのかを調べた結果が表10である。女性であり、若紫の保護者でもある立場の人物として尼君をとらえていると推測できるのが、「源氏に見られたことを心配」に分類した以下のような解答である。

H光源氏はどうでもよくて、人に見られたかもしれないということを気にしている。

I僧都は、光源氏を見たい好奇心だけで心がいっぱいの様子だが、尼は自分らのやりとりがのぞかれないかという不安がぬぐいきれていない。

H・Iともに、源氏への興味を感じているだけの僧都とは異なり、のぞかれる側にある女性の立場からの心配や不安をとらえている解答である。僧都とは全く異なった立場と心情を持つ尼君という人物像を形成できているのである。

以下のJは、「源氏に会いたくない」として分類した、尼である立場という<しかけ>には反応しているが、のぞかれる側にある女性の立場という<しかけ>には反応できていないのである。また、「僧都を批判」している例に数えたKの解答は、源氏に会いたがっている僧都の心情とは違った尼君の心情を明らかにしていると言えるが、両者の立場の相違を読みとっているのかどうかは、判断できない。

J俗世を私は離れているので、人にはあまり会うまい。

K女好きの光源氏に会いに行くなんてとんでもないことを僧都は言うと思っている。

古典テキストの人物たちは、それぞれの立場や境遇といった規制の中で生きている。結果から、ほとんどの学習者は、テキストに描かれている人物の心情を理解しているということができ、このことはおそらく可能である。しかし、その背景にある立場や境遇、人物相互の関係などに関してはどうか。調査の解答には、人物の心情理解はできていても、必ずしも人物の立場や境遇などをも考慮しているとはいえないものも多く見られた。立場や境遇、相互関係が、人物の心情を作り出していることを考えると、これらは、学習者にとって、人物像を形成するための重要な<しかけ>であるはずである。このような<しかけ>に反応して読むことによって、より具体的でテキストに忠実な人物像を描くこともできようし、現代の学習者自身をより異化的に見ることもできるだろう。

### 3. 4. 分析Ⅳ—伏線によるくしかけ>への反応—

調査Ⅳでは、テキスト中の情報を関連づけさせる伏線への反応を調べた。問⑨の、源氏が若紫に魅かれている理由については、表11のように分類した。「(かの人・母・尼君)に似ていたから」という解答は、問われている部分以前の情報を関連づけ、源氏の心理を説明したものである。「かの人に似ていたから」とする解答は、源氏が若紫に魅かれていることの背後に、別の人物の存在を想定したものと考えられる。これは、藤壺のことが頭から離れず、無意識のうちにも藤壺によく似た少女に魅かれてしまう光源氏的心情を理解することができている。テキスト中にある、藤壺を意

[表11]

「かの人」に似ていたから	18(50.0%)
母に似ていたから	3( 8.3%)
尼君に似ていたから	2( 5.6%)
少女が可愛らしいから	4(11.1%)
無解答	9(25.5%)

識させる伏線がくしかけ>として学習者に機能したのである。「母・尼君に似ていた」とする解答は、「かの人」自体を誤ってとらえているのである。さらに、「少女が可愛らしいから」の解答は、源氏の自覚を述べた表現を指摘できておらず、若紫の背後に藤壺の存在を意識させるというくしかけ>に反応できていないのである。テキスト中の他の部分と関連づけさせる伏線には反応せず、源氏のかいま見による若紫の描写やそれに対する源氏の感想にのみ反応した解答である。

「小柴垣のもと」は、光源氏による若紫発見の物語であると同時に、藤壺への思いに源氏自身が気づき、苦悩してゆく、源氏と藤壺とのかなわぬ恋の物語の発端でもある。このようなテキストの位置から考えても、「かの人」(藤壺)に似ているから若紫に心魅かれた、という源氏の心理は、後の物語展開にも重要な伏線である。他の問いと単純に比較することはできないが、この問いの正解率は低く、無解答も多い。さまざまな伏線を想定しなければならないが、古典テキストにおいては、テキスト中の他の部分との関連づけが困難であるといえるかもしれない。

#### 4. 考察のまとめ

以上の分析を、次の三点に関してまとめ、古典学習指導への提言としたい。

(1) 調査対象がかなりの読解力を持つ学習者であったことと、傍注テキストによったこともあり、古典テキストであっても、総じて、くしかけ>に反応して読んでいる学習者像がうかがえた。学習者が、くしかけ>に反応して読むことができていたのは、テキストに描かれている表現を手がかりに、人物の心理を理解し、外見を思い描くこと、場面構成を理解すること、現代の読者にも共通なイメージがある素材を手がかりに和歌を理解すること、である。これらは、古典テキストに特有のくしかけ>ではないため、学習者にとっては、これまでの読みの経験がそのまま生かされると考えられる。つまり、傍注テキストという、古典であっても言語的な困難を伴わないテキストを読む際には、それまでの読みの経験にしたがって読むことによって、くしかけ>に反応し、一応はテキストを理解、作品像を形成することができるのである。

(2) 学習者が反応できにくかったくしかけ>とはどのようなものか。調査結果からは、古典特有のことば、テキストには明確に示されていない人物相互の関係や立場、境遇が指摘できる。古典特有のことばに関しては、その意味を理解していても、読みの中に生かすことができていない場合が多い。書かれていることの意味は理解できるが、そのことばから心情を読みとること、そのことばの効果を考えることなどはできない段階である。このような段階の読みには、古典特有のことばの意味だけではなく、どのような場合に用いられるのか、どのような効果を生み出しているのか、また、助動詞や助詞にも心情が込められていることなどをも、学習者に知らせる必要がある。つまり、くしかけ>を意識させることによって、それを読みの方法にまで高めるのである。また、人物相互の関係や立場、境遇は、それが社会的・時代的基盤に基づくものである場合も多い。学習者の

読みが、現代からのみ見た一面的なものになってしまうのはここにも原因があるので、学習者が反応しにくい<しかけ>として、これらは補う必要がある。

(3) <しかけ>に反応して読むということと、テキストを批評的に読むということは別である。<しかけ>に反応して読みながらも、人物の行為に違和感を感じていたり、人物を時代状況の中に置きながらも、現代の自分にとっては評価できないとしていたりする学習者が見られた。<しかけ>に反応して読むこと、その方法を身につけさせることとともに、学習者が、違和感や共感を感じている部分は取り出さなければならない。また、このような違和感や共感によって、それを感じさせる<しかけ>がどこにあるのかを考えさせることもできる。<しかけ>に反応してテキストを読むこと、学習者の中に生じた違和感や共感に向き合うこと、これらを合わせて考えさせるところに、古典学習の意義が認められると考える。

—注—

1. 拙稿「古典作品の読みの可能性—作品の<しかけ>に注目して—」（「広島大学教育学部紀要 第二部 四二号」）では、作品の<しかけ>を「読者の読みが成立するテキスト上の諸契機」と定義し、稿者の読みの内省から帰納的に<しかけ>を抽出した。以下の通りである。

- ① 語りの視点…「小柴垣のもと」では、「かいま見」表現によって、語りの視点が光源氏に寄り添ったり離れたりする。他の人物や場面の描写から、光源氏の心情を読みとることを可能にする<しかけ>である。
- ② 言葉のはたらき…助動詞や助詞、古語のはたらきに注目することによって、人物の心情が理解できたり、読み換えができたりするという点で、現代の読者にとっての<しかけ>となりうる古語がある。
- ③ 語の持つ和歌的意味…歌ことばは、その語の持つ和歌的意味から、具体的にイメージすることを可能にする<しかけ>である。
- ④ 人物設定・状況設定…人物の立場や境遇、関係などの設定は、状況の中で生きる人物たちの心情や行動への理解を促し、意味づける<しかけ>となった。
- ⑤ 人物描写…人物の容姿や行動の具体的な描写は、読者にその人物像を生き生きとイメージさせ、同化的読みや異化的読みを生じさせるという点で<しかけ>である。
- ⑥ 伏線…テキスト中の他の情報を関連づけさせる伏線は、後の展開を予測させたり、隠れたテーマを想定させたりする<しかけ>となった。

2. 注1と同じ。

3. 傍注テキスト作成にあたっては、「源氏物語一」（新潮古典集成）を参考にした。

4. 「かいま見」表現に関しては、諸氏がその手法について解説している。以下には、「かいま見」表現を、その構造と効果の面から詳細に検討されている今井源衛氏の論を引用する。いうまでもなくかいま見は、「かいま見る者」と「かいま見られる者」との両者から成立つ行為であり、しかも作品に現れる場合には、読者はその文章を通して、一方には「見る者」の目を借りて「見られる者」の容姿を眺めつつ、他方では作者の解説によって、直接「見る者」の動きと心理とを知り得るのである。すなはち素材としてのかいま見の興味は、これを分析すれば「見る者」を見る興味と、「見られる者」を見る興味との二面から成っていると考えられる。（「物語構成上の一手法—かいま見について—」『王朝文学の研究』角川書店 1970年 p34）

また、今井氏によれば、「見る者を見る」興味とは（ここでは、読者が光源氏を見る興味であ

る)、

かいま見ようとし、あるいは見つつある人物の動きを内面的・外面的に追っていく興味。特殊な心理状態を追体験する面白さ。

であり、「見られる者を見る」興味とは、(ここでは、読者が尼君や若紫を見る興味である) 読者が自ら「見る者」の位置に立つことによって捉えるところの、「見られる者」の与える客観的印象に基づいて呼び起こされる興味。

であるという(同上書p.38)。学習者の同化的読みや異化的読み、テキストへの向かい方を分析するためにも、示唆に富んだ論である。

5. 「かいま見」表現における語りの視点をくしかけ>として意識することによって、どのような読みが可能になるのかは、広島大学附属高等学校での実践記録をもとに「教育学研究紀要 第三九卷第二部」(中国四国教育学会)で考察した。本論稿で導き出された仮説を検証したものである。